

函館の教育のあり方検討協議会（第4回）会議録

日 時	平成28年11月29日（火）18:00～20:22
場 所	函館市役所本庁舎8階第2会議室
出 席	<p>委 員 田 中 邦 明（北海道教育大学函館校教授） 齊 藤 縁（北海道教育大学附属函館幼稚園副園長） 山 田 幸 俊（函館市小学校長会事務局長） 毛 利 繁 和（函館市中学校長会事務局長） 中 島 悟（北海道高等学校長協会道南支部長） 中 村 和 代（函館市PTA連合会事務局長） 絹 野 重 治（函館市社会教育委員） 竹 内 正 幸（函館商工会議所事務局長）</p> <p>事務局 木 村 雅 彦（学校教育部長） 佐 藤 ひろみ（生涯学習部次長） 鶴 喰 誠（生涯学習部次長） 加 賀 重 仁（学校教育部学校教育課長） 柴 田 成（学校教育部学校再編・計画担当課長） 寺 本 公 彦（学校教育部教育指導課長） 辰 巳 哲 治（学校教育部教育指導課指導主事） 佐 藤 大 輔（学校教育部教育指導課指導主事） 小 松 将 人（学校教育部教育指導課指導主事） 村 上 貴 洋（学校教育部学校教育課主査） 松 本 大（学校教育部学校教育課主事）</p>
欠 席	<p>委 員 大 場 みち子（公立ほこだて未来大学教授） 井 上 実 香（公募）</p>
傍 聴	3名

1 開 会

出席者 8 名。過半数を超えているため、会議成立。

2 議 事

(1) 函館市教育振興基本計画の基本的方向性について

(田中会長)

それでは会の次第に従いまして、進めさせていただきたい。本日の開始は、これまでより早い時間になっているが、その分、十分に協議に時間を取りたいと思っている。8時半を目処に終了とさせていただきたいと思う。ご協力をお願いしたい。

それでは、本日の議題、「函館市教育振興基本計画の基本的方向性について」である。私どもこれまで協議を重ねてきたが、最初は「まちづくり」の視点、2回目は「教育における多様性」をいかに尊重するかという観点、3回目は「縦の接続」ということであった。本日はこれからのまちづくりを担う人材を育成するという観点から、少し高い視点であるが、函館の教育が目指すべき人間像、子どもの姿を通して函館の未来を担う子どもたち、こういった人間像をどうするかという、何を指すかというところで議論をしてまいりたい。事務局から資料の配付があった。資料1をご覧いただきたいが、これまでの協議会における主な意見について取りまとめたものである。それから、資料2は、11月5日開催の「はこだての未来・教育フォーラム」の開催報告について、非常に短くまとまっている。資料1・2について、少し説明をお願いしたいと思う。事務局からお願いしたい。

《事務局より、資料1，2に基づき説明》

(田中会長)

大変ありがとうございました。私もこのフォーラムには参加したが、委員の方も、私のお見かけした方は4名ほどいらっしまったと思うが、一言、ご感想を頂戴できればと思っている。こちらからご指名して大変恐縮だが、山田委員、お願いします。

(山田委員)

参加した感想だが、もっとたくさんの人にあの会は参加して欲しかったと思う。そして、今、アンケートを見ても、年齢層が非常に高い。これからの函館、未来の函館

というのであれば、高校生，それから大学生，もっと若い人たちがたくさん参加して欲しかった。これを見ても10代が1名，20代が1名という人数であり，せっかくのイベントであるので，もっともっと広く声をかけても良かったと思う。学校で言えば，保護者に強く働きかけてお話を聞いて欲しかった。

(田中会長)

絹野委員お願いします。

(絹野委員)

日本の教育が今，落ち込んでいる現状について，高度分業化という観点から，講師から非常に具体的に話をいただいたことが非常に大きな収穫だったと思う。具体的にこれをどうしたら改善したらいいか，函館の教育をどう改善したらいいのかということも，具体的に，地域とのネットワークと子どもとのネットワークをいかに深めて改善していくかということを知りやすくお話していただいたと思う。と，同時に，一般の先生方にたくさん来てもらったほうが良かった。管理職の先生方よりも，具体的に教育に携わる一般の先生方がたくさん参加し，理解してもらい，そして教壇に立っていただくということも非常に重要だと思う。

(田中会長)

中島委員お願いします。

(中島委員)

一番印象に残ったのが，岐阜県立可児高等学校では，地域の中にいろいろと高校生が溶け込んでいろんな活動をしている。資料に書いてあるが，学校と地域が連携することによって，人づくりとまちづくりを一体的に推進していると，そんな印象を非常に強く思った。そういう意味では，最後のパネルディスカッションの中で，土門さん，彼が言っていた「自分がもし高校時代，こうやって地域といろんな連携する場面があったら，もっと地域に対して関心を持ったのではないか。」という最後に強いコメントをされていたが，高校時代にそういうふうに地域のことについてよく知る，理解する，地域に飛び込んで活動することの大切さについて，改めて感じさせられた。

(田中会長)

中村委員お願いします。

(中村委員)

講演の中で、普段は大人だけが参加する会議に参加した高校生の、それまで漠然としていた将来の夢が、その会議の中で自分の役割を見つけたことで具体的な目標になったという話があった。それを聞いて、様々な職種や年齢の方と交流することは、その子なりに自分の役割や自分の存在価値に気づくきっかけになるのではないかと思う。また、子どもの年齢に応じて、周りの人と関わることができる場の必要性や子育て世代を迎え入れられる地域づくりの大切さ、特に、初めての育児を経験する母親が笑顔で過ごせる環境づくりの大切さを改めて感じた。学校や企業等を含めた地域が家庭を支えるまちづくりをできることで、そこに住む大人も子どもも、生き生きと生活するようになり、そういった環境の中で、自然に人づくりの連鎖が生まれる街となるのかなど、函館もそんな街にしたいなと思いながら講演を聞いていた。

(田中会長)

私は、資料をプレゼンテーションしただけでほとんど何もしていないが、一番印象的だったのは、大学生の土門さんが「私たちが何か行動しようと思った時にリスクがあるんです。リスクがあって足を踏み出せないということがすごく多い。」とおっしゃって、パネリストの藤澤さんが「そういうリスクは私たちが持ちます！」と断言してくださったところが、私は函館の誇るべき答えだなと感じた。しっかり支えてくれる方がいるなということが分かり、とても爽やかなパネルディスカッションだった。

絹野委員のご指摘にあったように、講師の浦崎さんがおっしゃった、現在の教育の荒廃や困難性は、分業、縦割りになって細分化されて全体が見えにくいという原理からきているとの指摘、これは大変印象に残った。そして、中学校などの先生は、学校現場は必死に動いているし、走っているし、ヘトヘトになっているという、これ以上は難しいのではないかというその悲壮感を少し感じる事ができた。そうした時に浦崎さんのおっしゃった、子どもを地域に出してくれれば、私たちが面倒を見ますというシステム。それから、パネリストの藤澤さんのように、元気な社会人は「僕たちだったら、ただで学校に行ってお話をさせていただきます」ということだった。地域が乗り込んでくるし、子どもを地域に出せば、面倒を見てくれる。そういうチャンスはたくさん函館にもある。そういうものに教育はどんどん乗り出していく、そういう時代になってきたのかなと思う。私は、そういう希望を、このフォーラムの感想として持っていた。

それでは、今日の本題に入らせていただきたいと思います。これからのまちづくり、

これまでの議論，フォーラム等での様々な成果を，函館のまちづくりを担う人材の育成という観点から函館の教育が目指すべき人間像，非常に難しいと思うが，何を指すか。本日の資料に「たたき台」がある。これから今日皆さんに協議をしていただくが，資料3について事務局から説明をお願いしたい。

《事務局より，資料3に基づき説明》

(田中会長)

ありがとうございました。今，資料3の説明があった。

この資料について質問はあるか。

ないようなので，私から1つだけ伺いたい。

A，B，Cの3つの分類はよく理解しているが，そのキーワードを抽出してくる場合に，函館市義務教育基本計画には，例えば「個性豊かに生きる子ども」，「やさしさを持って生きる子ども」，「たくましく生きる子ども」，「函館に生きる子ども」，「ともに未来を生きる子ども」，この5つの括りがある。これは全部，今，動いている計画であるが，この「〇〇に生きる子ども」という体系そのものは，いじってよろしいものなのか。例えば，この言葉そのものを修正するなり，分類を変えるなり，というご意見についても頂戴してよろしいということか。

(事務局 柴田課長)

そのように考えている。

(田中会長)

たぶん，ちょっと見ただけでも，不一致，分類として該当しないものがあるかもしれない。そういったことも議論になるかと思うので，エリアとしては，A，B，Cの括りでもってご覧になっていただくと。その時に，もし，5つの子ども像にもっと合理的なものがあれば加える，あるいは修正する，あるいは削除する，そういったことも議論にあがると思っている。事務局側は，議論の中身として，そういった理解でよろしいか。今日，初回なので確認したい。

(事務局 木村部長)

今の義務教育基本計画の5つの子ども像だが，これは現行の望む子ども像であり，これに拘ることなく，これから新しい，小さな子どもから社会人までというイメージ

を持っているので、あくまでもこれは参考までに今までのつながりを考えた上で記載したものであって、これが全面に出るということではない。十分ご議論いただいてという形でお願いしたい。

(田中会長)

キーワードを抽出するという、それからコンセプト、この3つの括りのコンセプトのつながりを考える。分類の体系は、この3つに収まるかどうかもわからない。跨がってくる問題もあると思うし、むしろ、3つのつながりの関係を、我々自身が定義していく、定義する。そういったことも議論していかなければならない。それでは、3班に分かれて、それぞれの視点に沿って人間像、特にキーワードを抽出してコンセプトにつなげていただきたいと思う。その前に、これまでの形式とはちょっと異なった議論の方法になるので、議論の進め方について、事務局から簡単にご説明いただきたい。

《事務局より、グループ協議の進め方について説明》

(田中会長)

ただいま手順の説明があったが、何かご質問はあるか。

難しいと思うが、1時間、各班での協議に入らせていただきたい。

それでは、それぞれのテーブルの方に移動をお願いしたい。

《グループ協議》

(田中会長)

長い時間ご苦労様でした。

ここで、それぞれのチームから発表していただくことになる。

C班から発表していただくが、よろしいか。

その前に、A、B、Cの括りは何なのかということについて、実はグループで議論した。間違っているかもしれないが簡単に説明したい。

Aのところは、個としての子どもを捉えた見方が一番濃く反映していると思う。

Bは、子どもを取り巻く環境、教育環境全体、家庭を含むし、地域の活躍している芸術家や教師も含む。教師が一番大きな役割を持っていると思うが、人、モノ、自然、そういった教育環境がBである。

Cは、教育環境と子どもとの関係。環境は子どもに対して影響を与えるが、子どもも実は教育環境を自ら作っている。学級の中では子ども自身が教育環境を作っているため、相互作用がある。その反対に、一方的に受け手となっている環境もあるかもしれない。関係のあり方、相互作用のあり方など、いろいろな見方を集め、Cという分類ができている。

子ども、教育環境、環境と子どもの関係性、そういった括りであると私どもは捉えた。ただし、これとは違う分類になるかもしれない。

まずはCグループからお願いしたい。山田委員、よろしくお願いします。

(山田委員)

Cグループは、「つながりを大切にする教育」、一番上にあるものだが、これについて、縦と横がイメージできるのかどうか、ということで話があった。そのために、今の話で言うと、Aが縦であり、Cが横ではないか、「つながり」が。ということで、そうすると「世界・未来」は、ここでは3つ横に並んでいるが、上に位置するのではないのかと考えたところだ。AとCの連携・協働をベースにして、その上にB「世界・未来」がイメージ的にあるという話がなされた。

前半の文節「自他の生命を尊重し社会性や規範意識を持って他者を思いやり」という部分が、若干違和感があるのではないか。Cのメインは後ろにある「多様な人々と通じ合いながら支え合いながら絆を結ぶ」、この部分がCの協働・連携にはふさわしいのではないか。そしてAと対比するのであれば、キーワードが3つ欲しい。例えば「共生・協働・連携」という意見も出てきた。それから、「郷土愛を育てる」、「函館を愛する」という観点から、魅力的な函館とか、函館らしさ、函館の資源を活かす、点の知識を線にし、それを面に広げる、というところで、「郷土愛」というような話も出て、郷土愛というのも、地域や社会、それから家族という広い意味でのつながりから求められるのではないかとの意見もあった。そういう意味で、その文言のところで出てきたのが、「主体的に自分から」ということで、「絆を結び、それから大切にする」というような言葉を入れたほうがいいのではないかという意見もあった。

それから、「地域のことを知る」ということでは、とにかく教えるということでインプットの方にウエイトが行きがちだが、最近いろいろな修学旅行等々でやっているような「函館をPRする、アウトプットする」といった活動を通しての、アウトプットするためのインプット、こういう場面の必要性も非常に重要になってくるという話があった。

(田中会長)

今、単純な質問があれば、ここでお受けしたいと思うが、よろしいか。

では、後ほど、相互討論ということでよろしいか。

次は、Bグループにお願いしたい。毛利副会長、お願いします。

(毛利副会長)

Bグループは、コンセプトが「世界・未来」ということと、人間像を見ていった時に、最初みんなで読んでみたが、率直な感想は「難しい」「よく分からない」ということであった。

そこで、文章を分解しながら、皆さんでこれはどういうことかということ进行分析した痕跡を書き出してみた。例えば「函館への誇りと愛」とはどういうことなんだろうといえ、それは「地域を知ること」から始まる。しかし、目標としては、「知ること」が目標ではなく、「誇りと愛」が目標である。

「地域課題への意識」というのは、非常に難しく、よく分からなかった。ただ、身近なところにアクセスするというようなイメージは当然あるだろうと思う。

それから「世界」というのは、もう外せないキーワードである。「見据える広い視野」ということ。そこで、よくこの部分を考えていくと、地域は、非常に身近な狭い狭義の地域、コミュニティで、そこから広がって函館という街になり、そして、その先には「世界」という広がりがある、ということで、この3つを思い切って、例えばということでこのようにまとめた。

「地域を知り、函館を愛し、世界に目を向ける」、最初の括りをコンパクトにした。あくまで最終目標であるので、こういう意味合いを含んでいけばいいのかなと思う。ただ、この意味合いが、途中ここにいる人達が、だんだん、このような世界から離れ、抜けたら、これがまた一人歩きするという懸念をしている。

続いて、後半部分だが、「未来に向かって努力し続け先頭に立って社会に貢献する人」、この部分もよくわかんないというか、こんな人はいないよねという話から始まり、なかなか難しいということで、まず、リーダーシップのことが出てくるが、これは、Bの一番下、国の教育振興基本計画の中に「組織を統率できるリーダーシップ」というのがある。決断とか強いイメージのことが出てくるわけだが、私たちは、この「先頭に立って」ということを挿入することを、とりあえず今日は断念した。取ることにした。「未来に向かって努力する」とか「貢献する」という部分を、「未来につながる行動ができる人」、「行動ができる」の文言は「チャレンジできる」とか「チ

チャレンジする」などそういう言葉も出たが、Aグループに「チャレンジ精神」というのがあるので、「行動ができる人」とした。

それから「つながる」という言葉だが、地域・函館・世界と見ていく中で、「つながること」で実は函館の良さがまた分かり、あるいは、「つながること」で世界と函館が発展していくという「つながり」を除いては考えることはできないだろうということで、そういう意味も大きく含み、「つながる」という言葉を使った。

また、「未来」というのは、自分の未来なのか、函館の未来なのか、というのもあったが、そのあたりは省いて、シンプルな文言に思い切って変えてみた。今日の話合いはそういうことだ。

最初に確認したが、今回の計画は、義務教育だけではなく、生涯学習という視点、人が生まれてから一生涯までのことである。一生のことをここでは考えなければならないので、そこを意識し、決めていかなければならないと思った。

(田中会長)

ありがとうございました。

義務教育の枠を超える展望が含まれていたと思う。キーワードから繋げて文章まで作ってしまった。いかがでしょうか。ご質問などあれば。では、これも後ほど、相互に議論したいと思う。それでは、Aグループは私から説明したい。

最初に、このA、B、Cの枠組みはなんだろうかという議論をしたと、先ほど申し上げた。函館市義務教育基本計画の、「個性豊かに」、「優しさをもって」、「たくましく」、「函館に生きる」、「共に未来を生きる」という、子ども像の全体をいろんな側面から見たところになっている。この「個性豊かに」というところは「知」、それから「優しさ」これは「徳」、「たくましく」というところは「体」。「知・徳・体」という、これまでの日本の伝統的な子どもの教育観。そこに相当している。ここまではAの子ども観というところからすると当てはめやすい。

しかし、「知・徳・体」の後についている「函館に生きる」「共に未来を生きる」ということになってくると非常に難しい。これらは、BとCの内容に深く関わってくる。Aの枠組みには、非常に合わせにくいと思う。

「成長、自立、創造」。子どもの育ちの観点から見ていくと、「主体的に学ぶ子ども」、「主体的にいろいろなものを身につけていく」は欠くことはできない。「主体的な問題解決に取り組む」ということだ。

それから「協働」という言葉も出てきた。主体的にやるが、そのアプローチはあくまで個人に閉じずに、集団の中で活かして学んでいくので、「協働」という言葉がキ

ーワードになっていく。

それから、個の学びというところから見ると、「自律的」、あるいは「自立」。自ら立つという言葉とともに、自らを律して自分の学びに責任を持つということは「自律」ということである。これもキーワードにしていこうと。自立する、自律的な学習。そのためには自らをどう認識するか、「自分自身を見つめる」、「自己認識」というものも重要なファクターである。この「自己認識」を高めていく、「自信」を持ち、「自己効力感」という言葉があるように、「気づき、発見、感動」があるような学びのプロセスが必要であろうということだ。それを通して、様々な多様な学び、他者との関わり、多様な経験、それが「創造性」に結びついていく。さらに「個性」、異質な集団で、多様性のある集団で学ぶ。こういう学びが必要だろうと。

さらに、函館の現状から言うと、フォーラムにおいて講師の浦崎さんが言ったように、小さい頃から色んな異質な集団に触れるような体験が少しずつ必要だということだ、発達段階に応じたプロセスが重視されるべきであるということだ。

こういう子ども像は、全国どこでも同様に考えているが、「函館らしさ」とは何かと議論をした。なかなかまとまらなかったが、「函館は寛容である」と。「何でも来いである」と。様々な国の人たちの文化や新しいものを、進取の気性ということがあって、取り入れるという「寛容性」が函館の子どものカラー、文化性として、強調されるべきではないか、ということになった。以上がAグループの意見である。

さて、3つが出たが、キーワードを出して終わりということにはならないだろうと思っている。Bグループは、文章まで作ってもらった。Bと同じように、Aグループでは「どのような状況でも夢に向けて」という部分、先ほど毛利副会長が言ったことと同様だが、こういう人はいないだろうということで、「どのような状況でも」というのは落とした方がよいのではないかというご意見があった。

ここを書き換える、修正するために、皆様からご意見をいただきたいと思う。

今、A、B、Cそれぞれに閉じて議論をしていた。色々ご意見が出ている。Aグループでは「どのような状況でも」を取ったほうがいいと、率直に申し上げてこのような意見が出た。いかがだろうか。キーワードとともに、これについてのご意見があれば。

「新たな魅力を創り出す人」は、これでいいのかなと。ただし、「文化を創る」ということにすると子どもには難しいだろうということで、義務教育基本計画の「新たな文化を創造する」だと厳しい。換言して、「文化を継承する」とか、「伝承する」とか、そういった言葉の方が相応しいのではないかという意見もありました。

(毛利副会長)

ところで、今日、このまま決めていくのでしょうか。

ここで話をして決めるわけではないですよ。まだまだですよ。

(田中会長)

枠組みが難しいということだけは、我々認識していると思う。

(毛利副会長)

難しい。とにかく難しいが、例えばAグループの「どのような状況でも夢に向けて挑戦し続ける」。

(田中会長)

私は大学生を預かっているが、へこたれている学生も多いし、まだ就職決まっていない学生もたくさんいる。

(毛利副会長)

「どのような状況」でもなんとかしていき、という人を求めていくのか、自分で持っている夢を追い続ける人を私たちは願っているのか。大きな違いだと思う。夢とはなんだろうか。みんながなりたいものに就けるわけでもないし、なりたいことをしているわけでもない、やっているうちに夢になるものもある。嫌々でも。

(田中会長)

夢という言葉は、あまり良い言葉ではないという方もいる。

(毛利副会長)

そうですね。私も夢という言葉は嫌いだ。

(学校教育課 加賀課長)

欧米人にとっての夢という感覚と、日本人にとっての夢という感覚は全く正反対だ。欧米人にとっては、夢は実現させるものだと思っているし、日本人にとっては、夢は実現しないものだと思っている。夢は夢だと。だから、夢という言葉自体が難しいかもしれない。「どのような状況でも～」で何を意味しているかということ、どんな

逆境でも負けないという、困難を乗り越えていく、たくましさ。そういう力強さというか、豊かさという言葉で間違いないと思うが、そういうことなのだろう。

(毛利副会長)

「どのような状況でも」というキーワードが出てきているということは、つまり、そういう諸々の意味を消せなかったというか、シンプルに表せなかった結果だと思う。実際に、生きていく上でもね。

(山田委員)

そこまでいくと、表現として欲張りかもしれない。「どのような状況でも」という言葉だと。

(田中会長)

以前、協議会で経済状況が厳しい家庭の話聞いた時に、そういう状況では子どもは育たないだろうな、どんな子どもでもおかしくなるだろうな、虐待なども起こりえるなと思った。それを「どんな状況でも」と括るのはあまりにも酷すぎるし、そういう子どもの環境を考えた時に、私は乱暴な言い方かなと思う。そこに違和感があったと思う。

(毛利副会長)

そういう子どもは現実において、それでも子どもは生きていかなければならないから何とかする。結構、本当にゴロゴロとそういう子どもがいる。そういうのにも負けないで生きていかなければならない子どもは現実にはいっぱいいるわけだ。翻って、私たちは、ある程度の給料をもらい、何とか生活費があって、それなりの生活をしている人の集まりだと思う。でも、本当に、とてつもない貧困で大変な人もいる。でもなんとかしている。そのなんとかする力は必要かなと思う。ただ、それがこの人間像に登場することなのか。先ほど、加賀課長がおっしゃった「たくましさ」とかね、「負けない」とか。

(事務局 加賀課長)

それがここに入るかという、結局、子どもを取り巻く環境の問題でもあるので、子ども自身、人間像のこととはちょっと違うようにも思う。また、結局、枠組みの話に戻ってしまうが。

(毛利副会長)

田中会長がまとめた「教育環境」という点では実は弱いと思う。協議会の議論でも出ていたと思うが、不遇な家庭が函館には多いというところを認識したのだけれども、こういう括りでいくと出てこない。そこにちょっと危険を感じる。そこに対して、市として、自治体として、社会として、手を差し伸べるようなことが、この計画の中に含まれていくのか、いかないのか、別問題なのか。教育環境としては絶対避けられない部分だと思うのだが。

(田中会長)

子ども像ということで、今日は議論を絞られていたが、私どもは決しておかしな議論をしているわけではなく、子ども像を描こうとすればするほど、子どもをめぐる環境のことを議論しなければならない。だから尚更、環境をなんとか立て直さなければならなく、我々もいろんなアプローチでもって、子どもを巡る環境をいかに改善していくか。子どもを良い育ちにつなげていくかということの調整。関係性の調整というのが・・・

(毛利副会長)

私は、子どもじゃなくて人間というふうに考えないとまずいと思う。今ここで議論することは、あくまでも生涯学習の観点だ。

(田中会長)

国連の概念の中に、「人間の安全保障」というのがある。「人間開発」。人間の潜在的な能力を開花させるために、教育環境を整備しなければならないし、それが開花できるようなチャンスを与えなければいけない。この間のフォーラムでも話があったが、empowermentという概念がある。一方、Bがenvironment, Aが人間だからhumanとなる。人間が全面的に開花するためには、環境を整備しなければならないし、その環境がうまく人間を育てていくように環境にも働きかける。子どもにも働きかけるんですね。子どもの持っている力を子ども自身の手で掴み取っていくような働きかけ、それがempowermentだ。human, environment, empowerment, こういうA, B, Cの括り、そういう括りでもう一度捉え直した方がA, B, Cの議論はうまくいくんじゃないかと思う。Aとして「人間そのもの」を捉える、さらにそれをBとして「取り巻く環境」、「その環境のあり方をどうするか」という問題でCの

empowerment。次回からの議論はこういう3つの視点から議論せざるを得ないんじゃないか。毛利副会長はどうか。

(毛利副会長)

いや、理解できてない。難しい。議論するには私には理解ができない。

(田中会長)

あと10分くらいしか、ちょっと今日は時間がないが、今日はこれ以上議論しても、何か画期的な絵が描けるという展望がないので、クールダウンしてですね。

(毛利副会長)

次回までに、事務局に整理していただくということで。

(田中会長)

私どももご協力したいと思うので、もう一度、陣形を組み直すということとしたいと思う。では、事務局にお戻ししてもよろしいか。

(2) その他

(事務局 柴田課長)

はい、ありがとうございます。次回会議の開催は2月を予定しており、議題として、本日協議の目指すべき人間像の確認と、目指すべき人間像にたどり着くための指針となります教育振興基本計画の基本的方向性をまとめてまいりたいと考えているので、よろしくお願いいたします。

(田中会長)

それでは、特に付け加えることがなければ、今日の議事はこれですべて終了とする。それでは2月にまたお目にかかりたい。どうもありがとうございました。

3 閉会